

# ぶら 探訪

## 福山城

小丸山から本丸まで、残された歴史の破片を訪ねて



福山城博物館蔵

講師：田中伸治

平成28(2016)年6月4日発行



## 東側から見たかつての福山城



幕末から明治初期に撮影されたと思われる。  
東坂三階櫓や鹿角菜櫓の姿を確認できる唯一の写真である。

「福山城誌」より



明治中期に撮影されたと思われる。  
建ち並んでいた櫓や屋敷が取り壊され、風景が変貌しているのがわかる。

横浜開港資料館所蔵

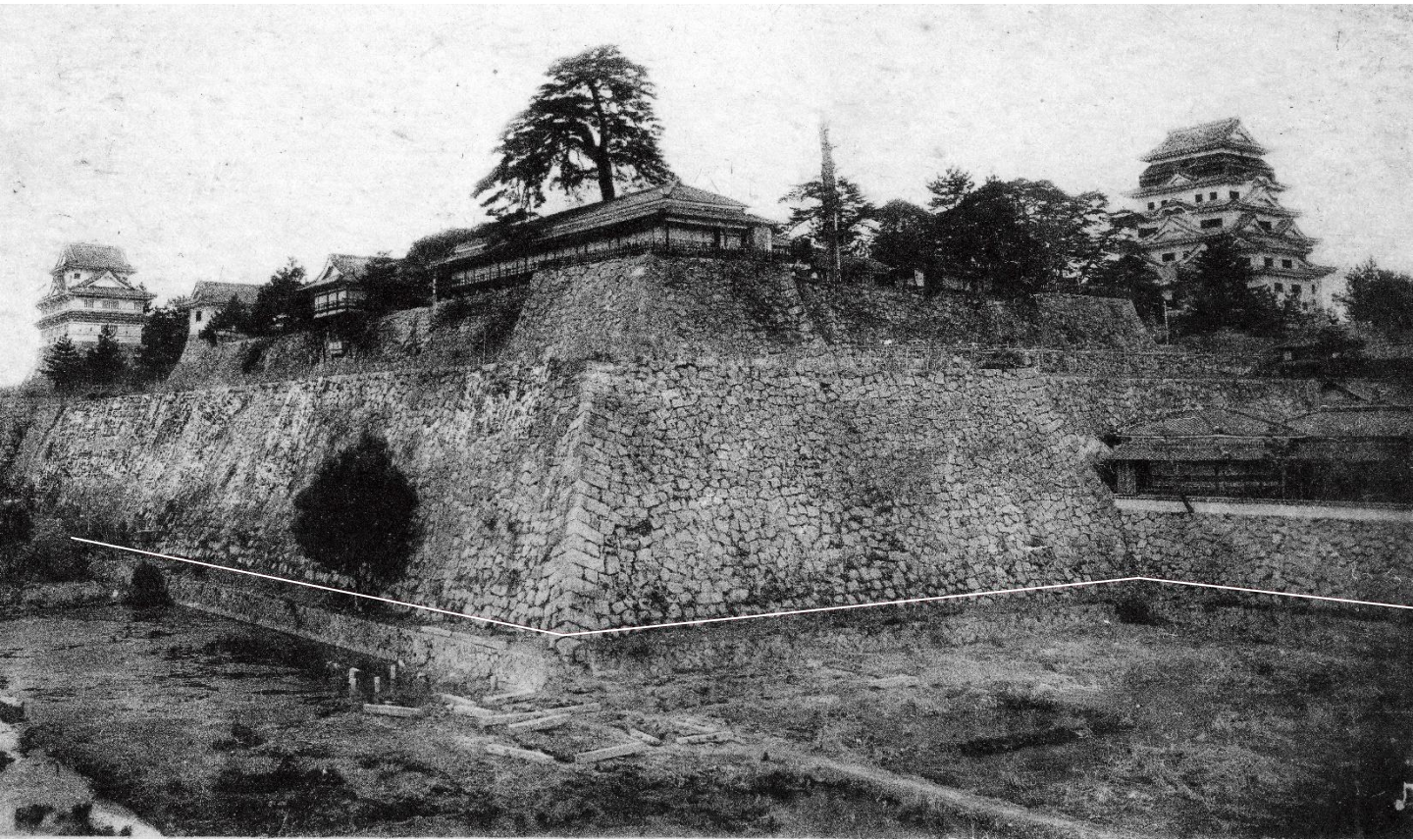


現在の福山駅北口方向から撮影されたもの。

今日の噴水公園がかつては内堀であった様子がよくわかる。

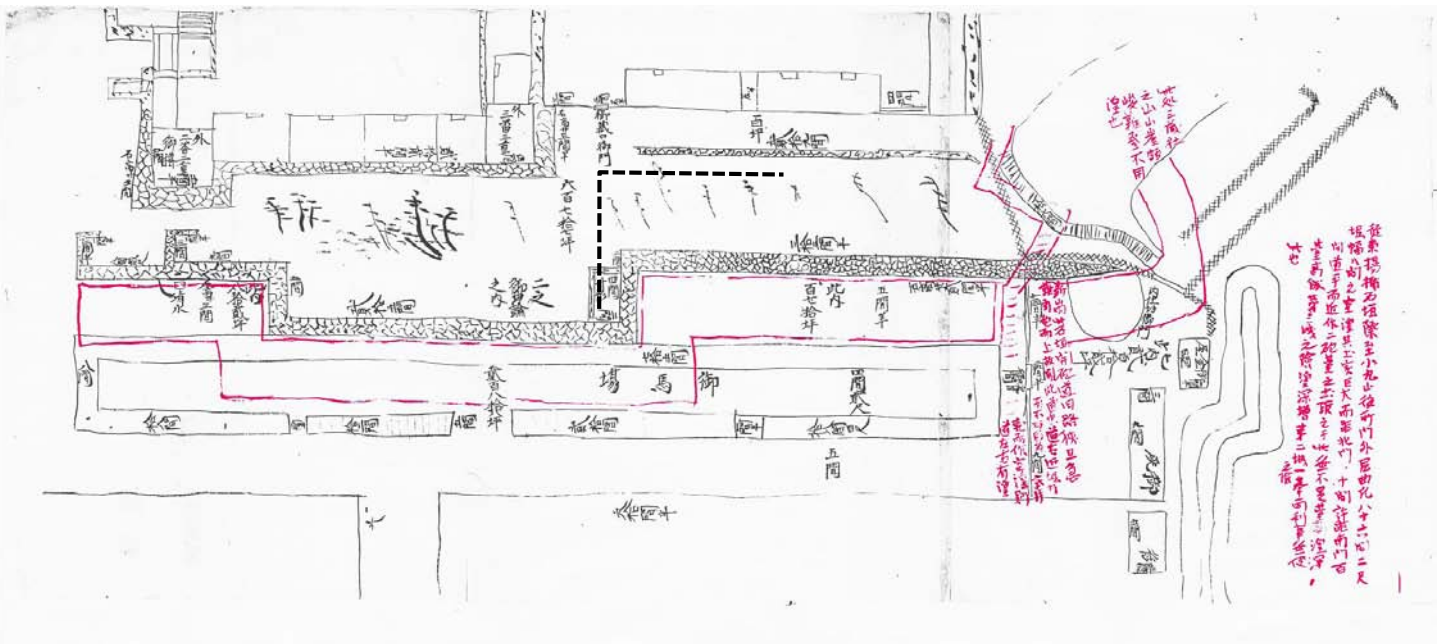
絵葉書より

# 東側から見たかつての福山城



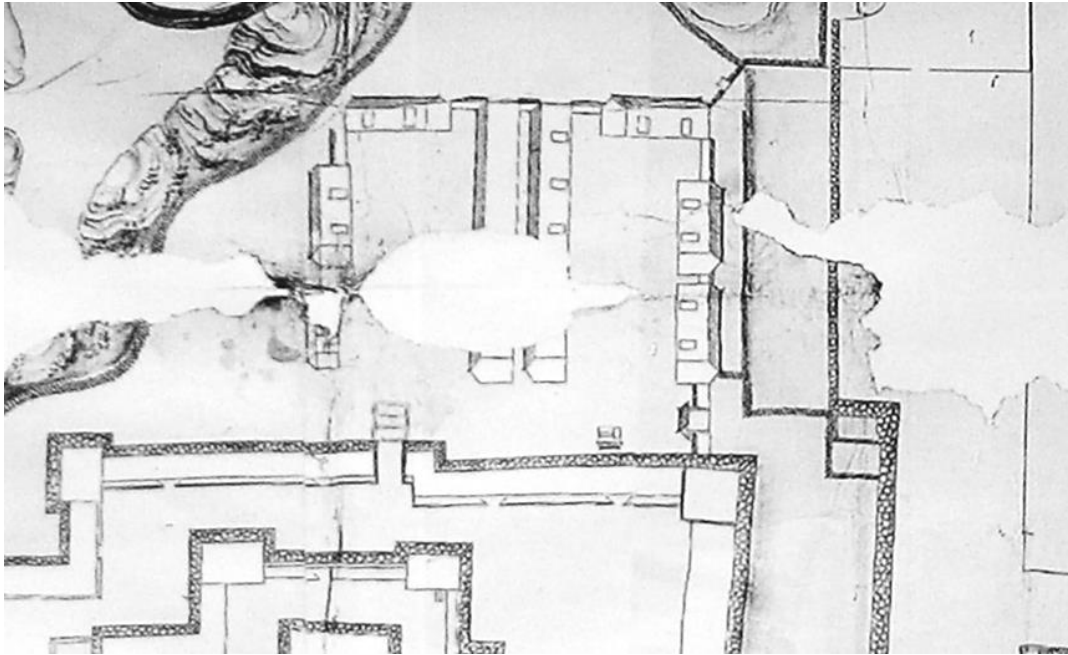
絵葉書より

# 江木颯水の福山城強化案

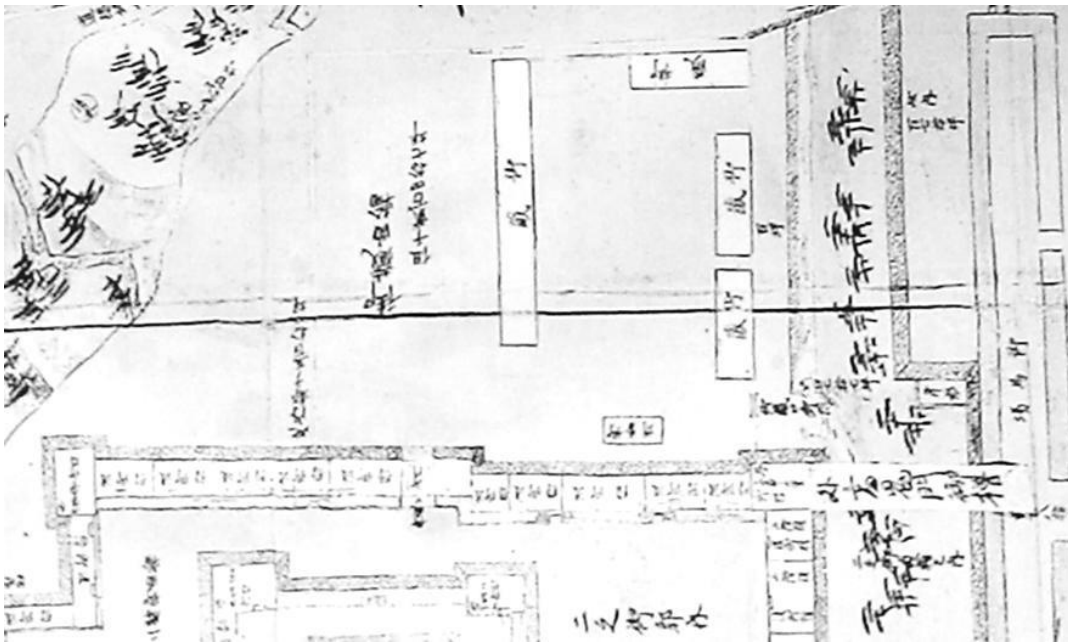


東京大学蔵

# 御用米蔵(五千石蔵)



1684年(貞享元年)絵図



1774年(安永3年)絵図

福山城二の丸の北側、現在の福寿会館およびテニスコート一帯には、かつて幕府から預かった米を収める「御用米蔵」と呼ばれる蔵が立ち並んでいた。この施設は1633年(寛永10年)に始められた非常時の備えとして一定量の米を幕府直轄と譜代大名の城に備蓄させる制度に用いられたもので、通常の年貢米と峻別し、「城詰米」、「御城米」、「城付米」、「御用米」などと呼ばれ、管理・運用された。

「水野記」と呼ばれる文献によると、福山藩では御用米蔵は桁行三間梁行十間の蔵が5棟、桁行三間梁行二十五間の蔵が2棟、番所、算用所(計量所)などから構成され、1634年(寛永11年)から5000石を預かり、1639年(寛永16年)に更に5000を追加し、計1万石を預かっていた。

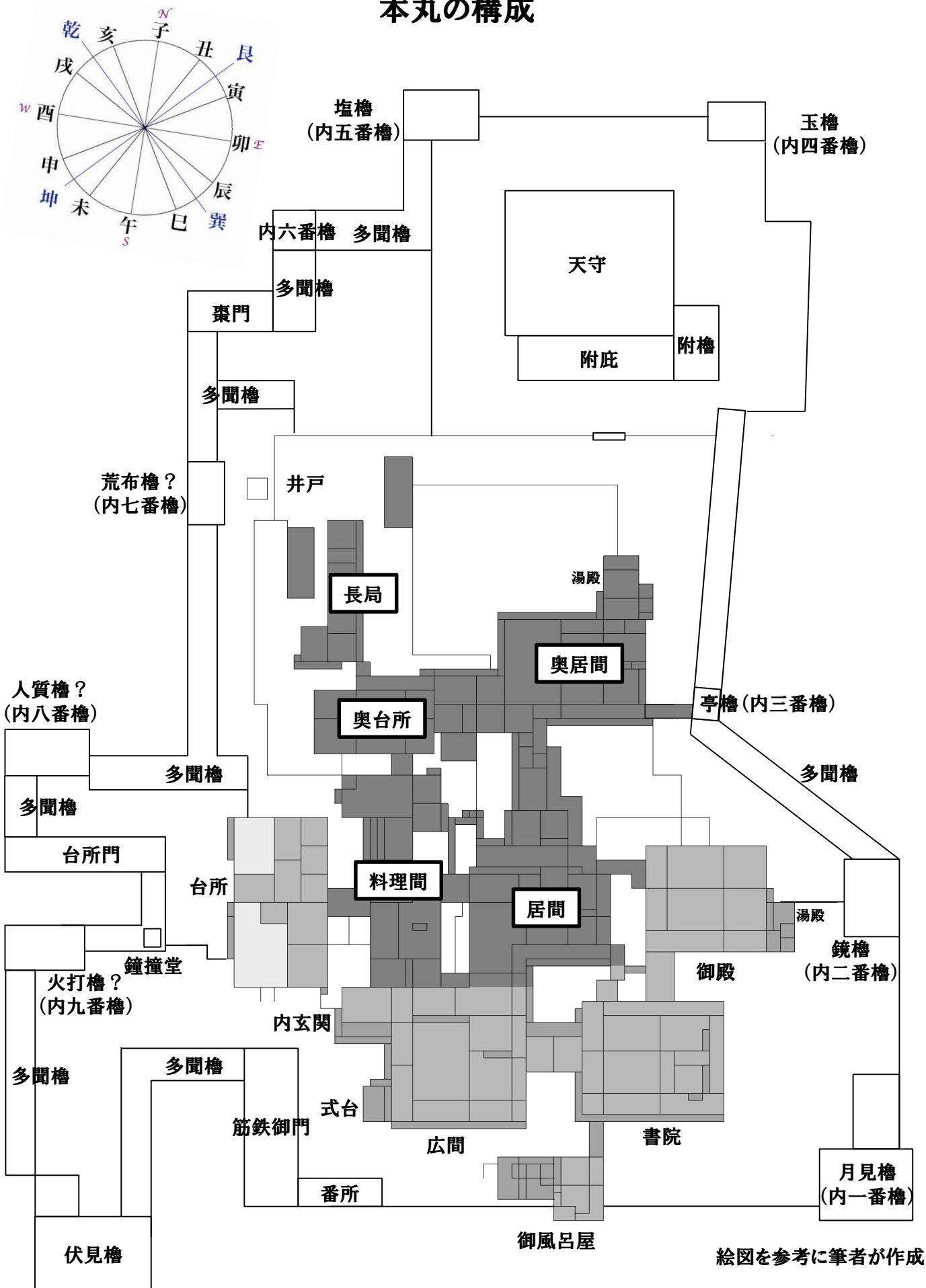
通説ではこれらの施設が「五千石蔵」の別名で呼ばれたとされているが、文献から総合的に判断すると五千石蔵は蔵全体ではなく中央付近に位置する梁行二十五間の蔵2棟の呼称である可能性が考えられる。

備陽六郡志によると、阿部正福の時代に御用米(御預米)を預からなくなり、1750年(寛延3年)に3ヶ所の蔵が倒壊したと書かれており、1774年(安永3年)の絵図にも、この記述通りに蔵を欠いた状態で御用米蔵が描かれている。

廃城後、御用米蔵は全て撤去され、跡地は民間に払い下がられ梨園などになったが、昭和初期に東半分の敷地に海産物商「安部和助」の別荘が建設され、現在の福寿会館となっている。また、西半分はテニスコートが設置され、現在に至っている。

参考文献 「備陽史探訪 172号『福山城の御用米蔵について』」

# 本丸の構成



絵図を参考に筆者が作成

※阿部時代には、本丸の櫓を「内」として、伏見櫓を除外し月見櫓から火打櫓まで番号で名称が振られていた。  
 ※本丸御殿のうち、濃い色塗り部分が阿部時代に撤去されている。

# 本丸の櫓名称の謎

福山城の櫓名称は、通説に疑問のあるものが存在する。

## ■内六番櫓

本丸北西に位置する内六番櫓は通説では水野時代の名称は不明となっている。しかし、備陽六郡志(P.12)には次のような記述がある。

「人質櫓 神辺方来 乾之方に有」

本丸で乾(北西)に位置する櫓は内六番櫓以外にないが、現在はなぜか西(西)に位置する内八番櫓が人質櫓とされている。なお、「人質」という名称は通用口(台所門)の側で城下からもよく目立つ現在の位置よりも、裏口(棗木門)の側で裏鬼門の方角でもある内六番櫓の位置である方がどちらかと言えば相応しいように思える。

## ■荒布櫓(内七番櫓)

西北(戌)に位置する櫓であるが、備陽六郡志では、「荒布櫓 右同断 坤之方に有。」と、南西(坤)にあると書かれている。なお、備陽六郡志にはこの方角(戌)の櫓についての記載はない。

## ■人質櫓(内八番櫓)

本丸東に位置する内八番櫓は通説では「人質櫓」とされている。しかし、上述のように備陽六郡志では人質櫓は乾の方角にあると記されており、阿部時代の絵図には内八番櫓の位置に「内八番火燈御櫓」と書かれたものがあるなど、この櫓は「火燈櫓」である可能性が高いと思われる。

## ■火打櫓(内九番櫓)

現在、火打櫓とされている櫓は備陽六郡志の次のような記述から比定されていると思われる。  
 「火燈櫓 右同断 時之鐘之後に有。」  
 たしかに、この櫓は鐘楼の側に存在しているが、備陽六郡志にはこの櫓の方角(南西)について、別の記述がある。  
 「荒布櫓 右同断 坤之方に有。」  
 この記述が通説ではなぜか西北(戌)に位置する内七番櫓とされているが、方角のみから判断すれば、内九番櫓以外を比定するのは困難に思える。一方、「時之鐘之後」は鐘楼の北側に位置する現在の人質櫓(内八番櫓)という判断も不可能ではない。また、上述のように、絵図には内八番櫓を火燈櫓と記したものがあるので、内九番櫓は火打櫓よりも「荒布櫓」である可能性が高いと考えられる。  
 ちなみに、火「打」櫓という現在の名称は江戸時代には見られず、備陽六郡志では火「灯」櫓、絵図でも火「燈」御櫓となっている。時系列から判断すると、「打」は近代の郷土史家が部首を間違えたことから発生したようである。なお、「火灯」とは福山城天守最上階にあるようなロウソク型の窓「火灯窓」に由来すると思われる。

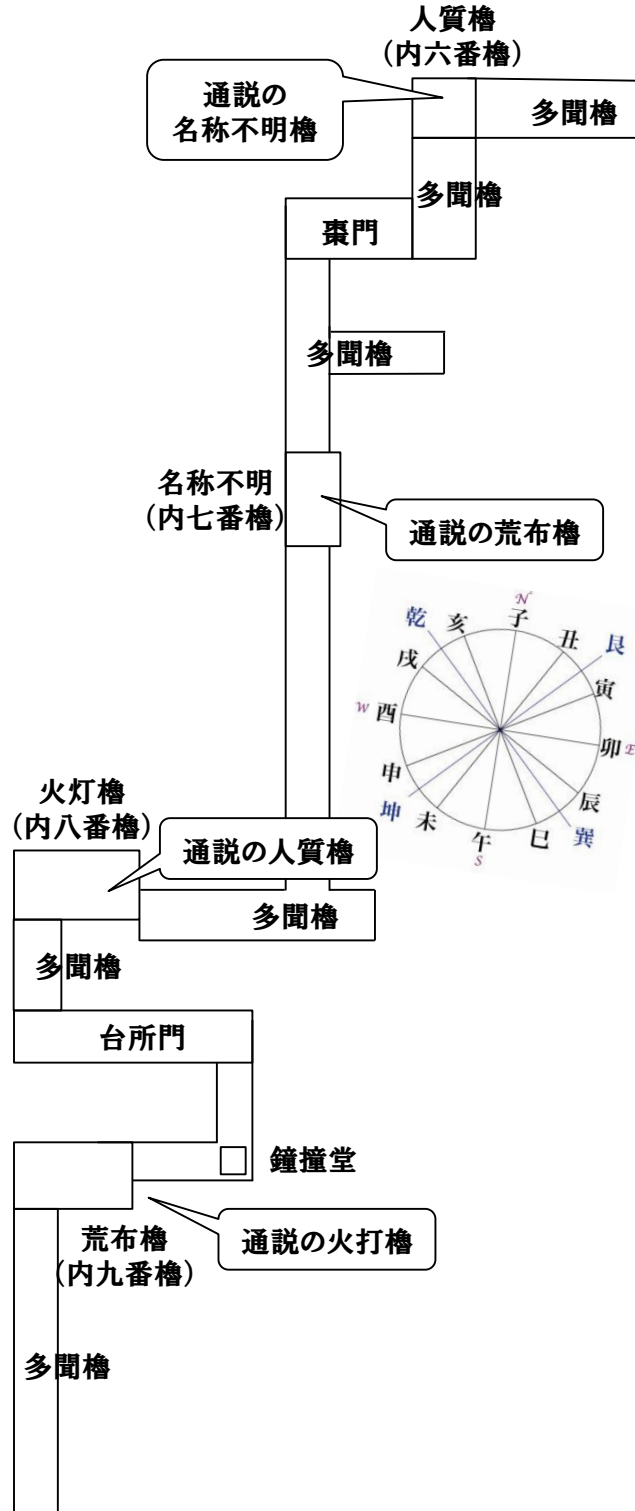
ところで、備陽六郡志はどこを基点に東西南北を記しているかを判断するとき、次の記述が参考になる。

「亭櫓 東之方ニ有」

亭櫓は他の資料と照らしてもその位置は確実なので、逆説的にここが東であるならその西側、すなわち本丸中心部を基点にしていることがわかる。

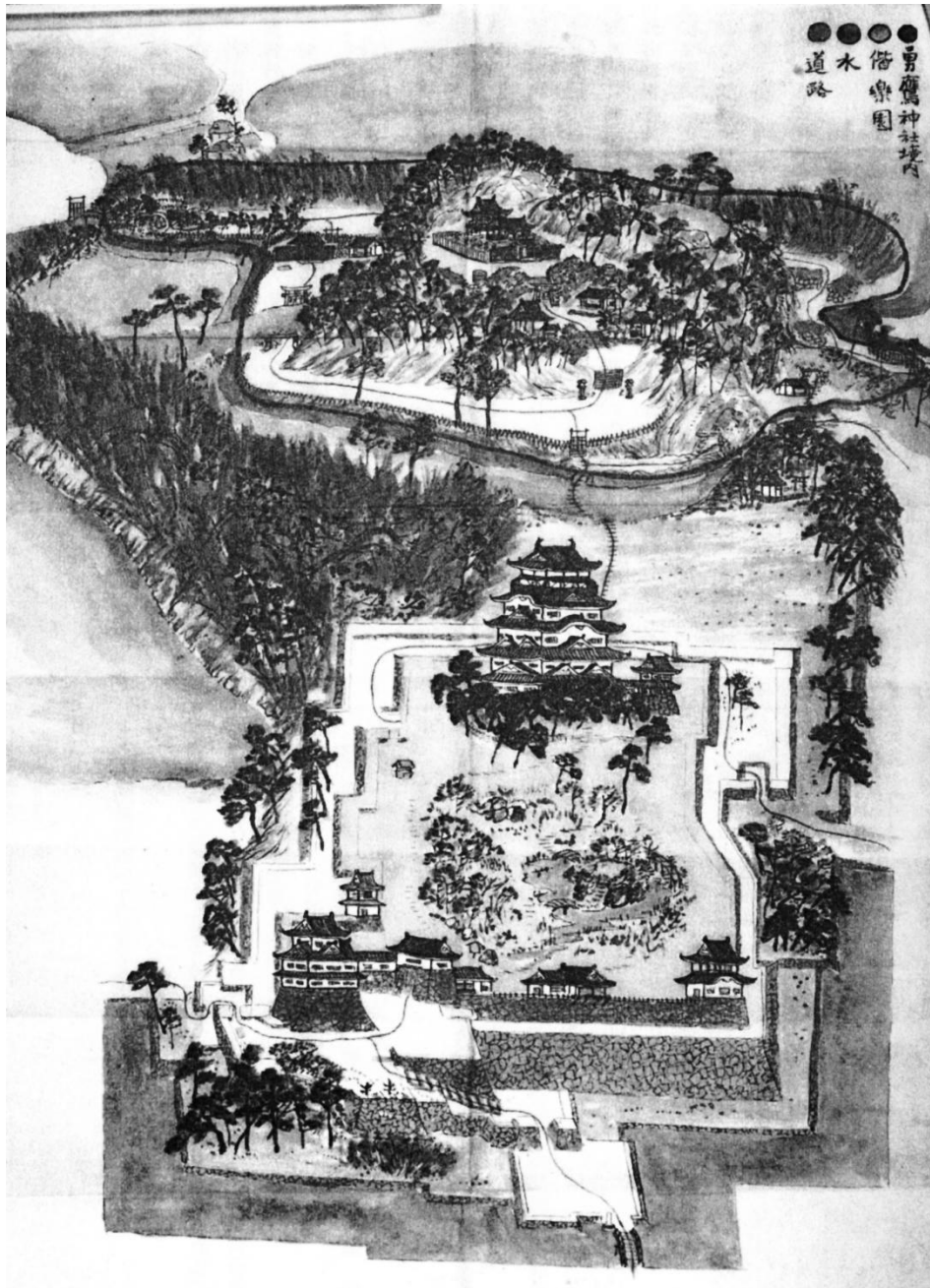
以上から導き出した櫓の名称を右図にまとめた。

## 新解釈の櫓名称



## 明治初期の福山城の様子

明治8年(1875年)の福山公園(偕楽園)設置直後を描いたと思われる絵図。月見櫓が比較的後まで残っていたこと、本丸の苑池がこのころには存在していることがわかる。また、本丸に上がる東側の階段が公園設置当初には設置されていないことがわかる。



絵図:「アーカイブスふくやま 第4号」より

## 昭和初期の本丸の様子

「舊福山城本丸址を以て公園となし、福山公園と稱す。標高二十一米二 廣表四千六十三坪九二[一町三段五畝一三步九二]東西兩坂路の外に南方[正面]北方[裏道]より登る道がある。本丸址以外は民有地であるから人家あり、荒蕪地あり、櫻園あり、テニスコートあり、麦畑あり、雑然紛然たり。公園内北側に國寶天守閣南面して屹立し、毎日登閣を許す[登閣料金十銭]南側に國寶御湯殿(今清風樓と稱する料亭)あり、春季木ノ芽田樂を名物とす。國寶伏見三層櫓、同筋鐵御門は西端に、貸席葦陽館は南端[月見櫓址]にあり、その他園内に義勇奉公碑(東郷元帥書)、黄金水、官祭福山招魂社、鐘樓、阿部伊勢守正弘公銅像、忠魂碑(山縣元帥書)御野立所[遙拜所]函館出征記念碑、江木鑄水碑、寺地舟里碑、茶店、猿小屋、孔雀小屋、小鳥小屋、鳩小屋、泉水[噴水]四阿、國寶標石四基(小山五千石翁寄附)等あり。天守閣前には老松轟々天を擧ぐ、泉水には梅、櫻、海棠、藤の棚等の觀賞樹を植込み、周廻の壘上(渡櫓跡)にはベンチを据えて眺望に便す。福山市街は一眸に聚る。」

「福山城誌」(昭和11年)より



## 福山公園 (現:本丸跡)



絵葉書より

## 征露記念碑(忠魂碑)

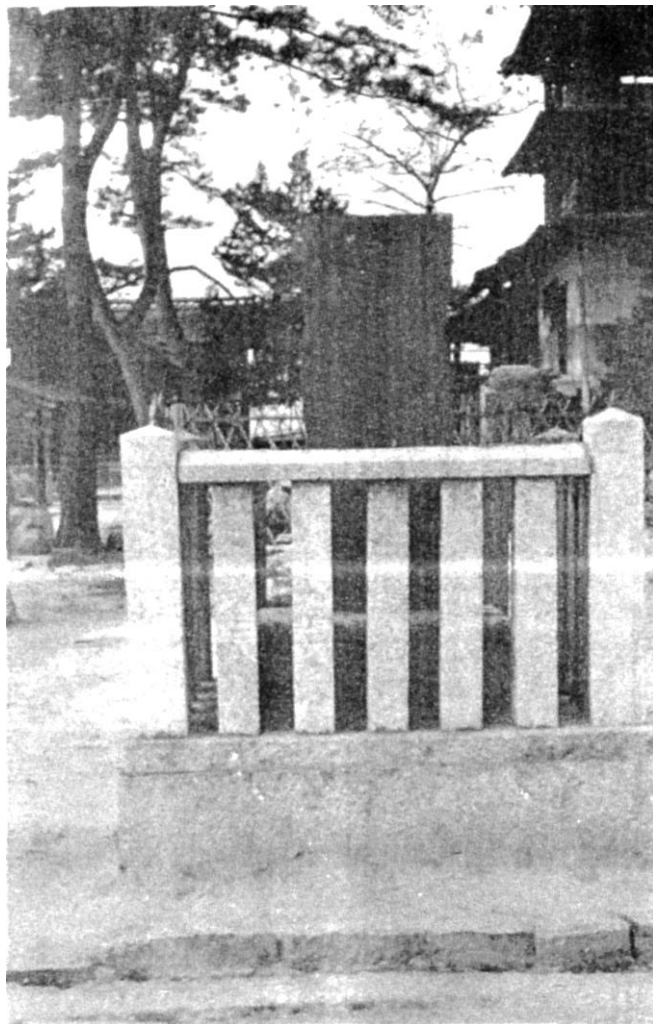
碑自体は現存しないが、柵の石柱だったと思われる石材は跡地側の石垣直下に残されている。



絵葉書より

## 寺地舟里碑

寺地強平(雅号:舟里)は福山藩士寺地平助の子として生まれ、蘭学を学び藩立医学校兼病院「同仁館病院」の初代院長となる。碑文は阪谷朗廬の撰。



「鷹」6号より

# 阿部正弘像



旧「阿部正弘像」

絵葉書より

大正11年(1922年)に阿部正弘を顕彰するため福山市民有志により建立される。建設費は5万円で全額寄付により賅われた。像は高さ14尺(約4.24m)、原型は新進気鋭の彫刻家「武石弘三郎」により製作される。台座は関西建築界の父と言われる福山出身の建築家「武田五一」により設計されたもの。太平洋戦争時の戦時供出で像と銘板が撤去された。

## 御野立所(元 遙拝所)



「鷹」6号より

# 国旗掲揚塔



昭和13年の写真より

「郷軍福山市聯合分會海軍班が日露海戦三十周年記念事業として軍艦三笠のマストになぞらへた国旗掲揚の鐵塔は既報の如く福山城の東南隅阿部公銅像前に建設中であつたが、二十一日竣工し二十七日海軍記念日當日午前九時から掲揚式を舉行することになつた右鐵塔は總工費千五百圓高さ百尺で國寶天主閣と共に大空へ聳え立つてる」

「青むしろ6月号」(昭和10年)より

## 焼失前の御湯殿(清風楼)



「戦災等による焼失文化財 建造物篇」より

「御物見の段[三間半四間半]と御風呂[三間半三間半]に分る。伏見拝領。床、書院、天井等桃山時代の建築として國寶に列す、御物見の段は南面し、座敷を上中下の三段に分つ、上段の間は藩主が湯上りに涼をとり、城下を眺望せしところ、勾欄を廻らし、石畳上に突出す。中段は近臣の伺候する所、下山は忍従者の控へる所である。風呂は蒸風呂であつたらしい、元は湯殿(皇帝お間)へ廊下つゞきであつた。

明治七八年頃、土族榎村某此の湯殿を改造して料理業を営み、清風樓と名附く、後柄澤及び八木兩氏交々經營に當り、現今の片山氏に至る。」

「福山城誌」(昭和11年)より

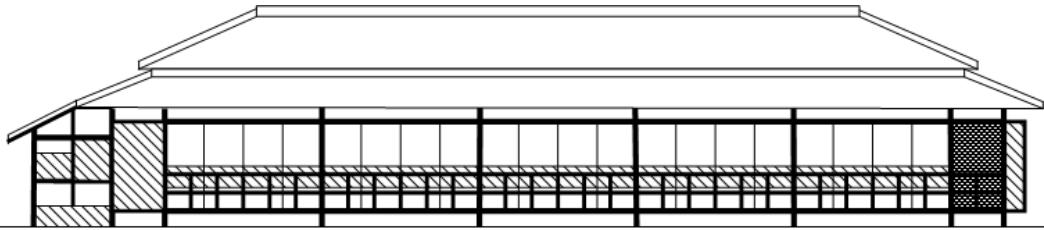
# 葦陽館

明治二十一年三月栗原喜助等發起人となり、公園繁榮策として月見櫓址三十坪を縣より借用して貸席葦陽館を建設した。株主二百六十三人、明治三十六年増築、後ち建物を講演保存會へ寄付し、今日に至る。

「福山城誌」より

増築前

葦陽館平面図(南側)



増築後



古写真を参考に筆者が作成



1952(昭和27年)福山市鳥瞰図



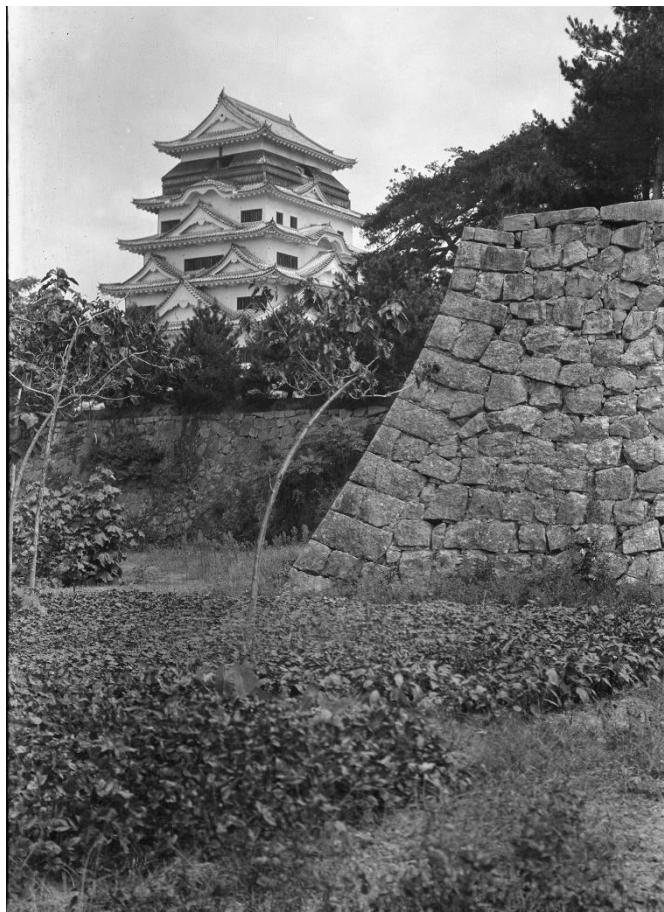
福山城博物館蔵



これはどこでしょう？



「鷹」6号より



アメリカ議会図書館より



絵葉書より

1947/10/11(昭22)

小丸山



1961/05/06(昭36)





# 備陽史探訪の会

---

【事務局】

〒720-0824 広島県福山市多治米町5-19-8

TEL 084-953-6157

E-mail [info@bingo-history.net](mailto:info@bingo-history.net)

公式サイト

<http://bingo-history.net>